兵站自動車第三中隊、中支戦線を行く

中村善紀
江原町二丁目

昭和十二年七月七日、北京郊外の蘆溝橋で、日本軍は当時の中国軍から不法な発砲を受けたと称して中国軍を攻撃した。日中両国は不拡大方針をとったが、現地軍は全面的に戦争を開始した。これが日中戦争の始まりである。日本軍は北京、上海を攻略した。中支（中国中部）では一〇一師団が呉淞（ウースン）で敵前上陸を敢行した。一〇一師団は関東を中心とした予備、後備役の召集将兵で編成されていた。敵兵団はクリークや塹壕を楯にして迎撃し、熾烈な戦闘が日夜続き、彼我共に多数の犠牲者を出した。蘇州河渡河戦では、連隊長を始め戦死する者多く、まさに屍山血河の修羅場であった。

自動車隊付軍医として召集

私は当時、医科大学卒業三年目で、未だ大学の研究室に勤めていた。昭和十二年十月十日、召集令状が本郷連隊区から届けられた。入隊は目黒の近衛輜重兵連隊で、所属は兵站自動車第三中隊（以下「三兵自」と表す）付軍医であった。この部隊は三個小隊から編成されており、予備、後備の召集兵が大部分で、みな運転免許証を持っていた。トラック六五輌、乗用車七輌で修理班もあった。

私は二〇歳の時の徴兵検査で乙種合格し、兵役免除されていた。入隊した時は予備役衛生部見習士官となり、襟に衛生部を表す深緑の兵科章と、見習士官の星がついていた。当時、中学・高校・大学の男子学生は、学校で陸軍将校から軍事教練を受けることが義務づけられていた。したがって、兵の動作、軍人精神は身につけていた。

兵站自動車隊は直接の戦闘部隊ではなく、第一線部隊はもちろん、兵站間の軍需品の輸送が任務である。武器、弾薬、糧秣、衛生材料、兵員、傷病兵など必要人員や物資を運び、時には道路補修や仮橋工事など自隊で行う。

戦線の道路は破壊されており、照れば黄塵万丈、降れば泥濘（でいねい）湿地、夜間の行軍も日常茶飯事で、ことに無灯火運転も少なくない。また、自動車隊の行軍は敵の目標となり、物資を積載しているので襲撃され易い。上海を制圧した中支派遣軍は、杭州

を落とし、南京を攻略すべく揚子江右岸を進撃しつつあった。

清水河の悲劇

三兵自部隊は、昭和十二年十二月に南京攻略のために湖州に駐屯し、前線へ軍需品の輸送に寧日なく、同月十三日広徳にいる部隊に弾薬輸送の命令が出た。五〇輌の貨車は砂塵を蹴って西進、蕪湖の北方三キロにある清水河畔にさしかかった。この河は幅一〇〇メートル、水深五〇メートル位で、水量の多い流れであった。橋は破壊されていたので、工兵隊が仮橋を架けておいた。重量の重い貨車は一輌ずつ渡っていた。師走の暮色が川辺にしのびよってきた。五〇輌の貨車がほとんど渡り終えて最後の車が不気味な軋みで橋の半ばに来た時、突然右草むらから小銃の音、運転中の二等兵の右胸部にあたった。瞬間ハンドルを切り誤り、メリメリと橋が傾き、貨車は右側へ向きをかえ河の中に傾き、みるみるうちに車体は水中に没してしまった。車が沈むと同時に戦友数名が飛び込み、便乗していた歩兵たちは救助された。しかし、運転兵を捜索したが、彼の姿を見つけることはできなかった。日はすでに暮れてきた。不安と絶望が心に広がった。

隊長は捜索を打ち切り、河畔に露営する決心をした。翌朝再び屍体の引き上げ作業を続けた。銃、帯剣、雑嚢等の所持品が発見され、最後に彼の冷たい体が引き上げられたとき、居合わせた将兵はみな慟哭した。一兵士は彼の冷たくなった手をしっかり握り、戦友の名を叫んだ。生きて還らぬは、祖国を発つ時すでに覚悟はしていたろうが、一瞬にして清水河の露と消えた。この日の午後、河岸で屍を荼毘（だび）にふした。荼毘と言っても近所から板片や材木を集めて積み重ね、その上に屍を置いて火葬にしたのである。分隊長以上が集合して白骨を拾い、戦友の胸に抱かれた。部隊最初の戦死者であった。

麦秋の徐州攻略戦

昭和十三年四月、大本営は徐州付近の敵撃破を企図し、北支派遣軍四個師団、中支派遣軍三個師団を以て北と南から攻撃を開始、三兵自部隊は南京から蚌埠（バンブ）を経て徐州へ向かい、第一線部隊への軍需品輸送の命令を受けていた。

上海南市に駐軍していた我が部隊は、昭和十三年五月二〇日、南京へ移動を開始した。嘉定、無錫、常州、鎮江を経て、二二日南京市へ入った。翌日、下関より揚子江を船で自動車五〇輌を渡し、浦口へ着いた。ここからは自動車を汽車に搭載して、将兵二個小隊が華中の蚌埠へ向けて出発した。我々はこの行軍で中国大陸がいかに広大で未開発であるかを再認識した。アカシアの並木が沿線にどこまでも続き、青空を掃くようにポプラの葉が初夏の薫風に舞い、楊柳も風になびき美しい。列車が北上すると満目すべて麦畑で、黄色になった麦穂が爽やかな音を立てて耳元を過ぎていく。集落を通過すると、戦争を知らぬのか中国の子供達が群がって菓子をほしがる。夕刻、蚌埠に到着、

直ちに車を列車から降ろした。

翌朝、衣糧廠及び衛生材料廠で、前線への軍需品を輸送することになった。途中の懐遠～蒙城間の道路には敗残兵が出没し、自動車を襲撃するという情報があるので、蘇家集から公道をさけて、友軍歩兵部隊や火器部隊が進撃した麦畑の中を走ることになった。徒歩部隊は重装備で、炎天下の行軍は容易ではない。暑さと疲労で隊列を離れる者もいる。途中で休止するものもいる。麦畑の軟らかい土は舞い上がり、黄塵で体中砂だらけである。行軍とは無情であり、生き地獄かもしれない。自動車もまた、道なき道でタイヤは土に埋まり、上下、左右にハンドルをとられ、低速で運転するしかない。また、いつ、どこで敗残兵に襲われるかわからないので、周辺を警戒しながらの行軍である。午後四時頃、南の空に墨を流したような黒い雲が現れた。見る間に一天を覆い暗くなったかと思うと、一閃の光とともに大粒の雨がポツリポツリと落ちてきて、車軸を流す豪雨が土煙をあげて降ってきた。泥濘が奔流となり、自動車のアクセルを強く踏めば却ってスリップし危険である。便乗兵はずぶ濡れとなり進行できないので、その日は車上露営となった。闇の中で荷台の上に天幕を張った。乾パンを食べて毛布にくるまって寝についた。

翌朝は晴れ上がったが、道はぬかるみで、泥だらけの部隊はやっと蒙城に到着し、軍需品を徐州攻略部隊に引き渡した。三兵自部隊は蚌埠の破壊された街に駐屯し、毎日悪路との戦いであった。

南昌攻略戦始まる。一〇六師団危うし

昭和十四年一月、南昌攻略のため日本軍は揚子江の要衝九江を占領し、南潯鉄道沿いに南下する部隊と、九江から名峰蘆山の山岳地帯を南下し、箬溪、安義を手中に納めた部隊が、挟み撃ちのように南昌を目指していた。山岳地帯に入った部隊は一〇六師団で、箬溪付近で敵に包囲され前進することができなくなった。兵力の消耗甚だしく、弾薬、糧秣も乏しくなり、師団全体が風前の灯となった。軍命令により、一〇六師団救出のため一〇一師団、佐枝支隊が急ぎ救援に向かい、血路を開いて生きている兵隊だけ野戦病院へ収容した。三兵自部隊は食糧の補給にあたり、帰りには傷病兵多数を後方の兵站病院へ何回も護送した。この傷病兵の中に、中学時代の軍事教練の教官の加治屋准尉がいた。彼は一〇六師団に属し、敵に包囲され右前腕の貫通銃剣をうけていた。輸送路を断たれた一〇六師団の兵は、畑の芋を掘ってかじって飢えを凌ぎ、麦穂を鉄帽の中でたたいて米を出して粥を啜ったと戦争の悲惨、無情、苛烈であることを語った。

四月には南昌も陥落し、日本軍の手中にあった。三兵自部隊は安義に駐屯し、兵站線の中継地で次期作戦の戦力の蓄積のため、日々輸送業務に努めていた。安義では将兵でマラリアに罹

るものが続出した。中隊医務室では血液検査（防疫給水部へ依頼）や治療（キニーネ）や予防薬投与も行った。伝染病予防の注射、軍陣衛生教育なども行っていた。

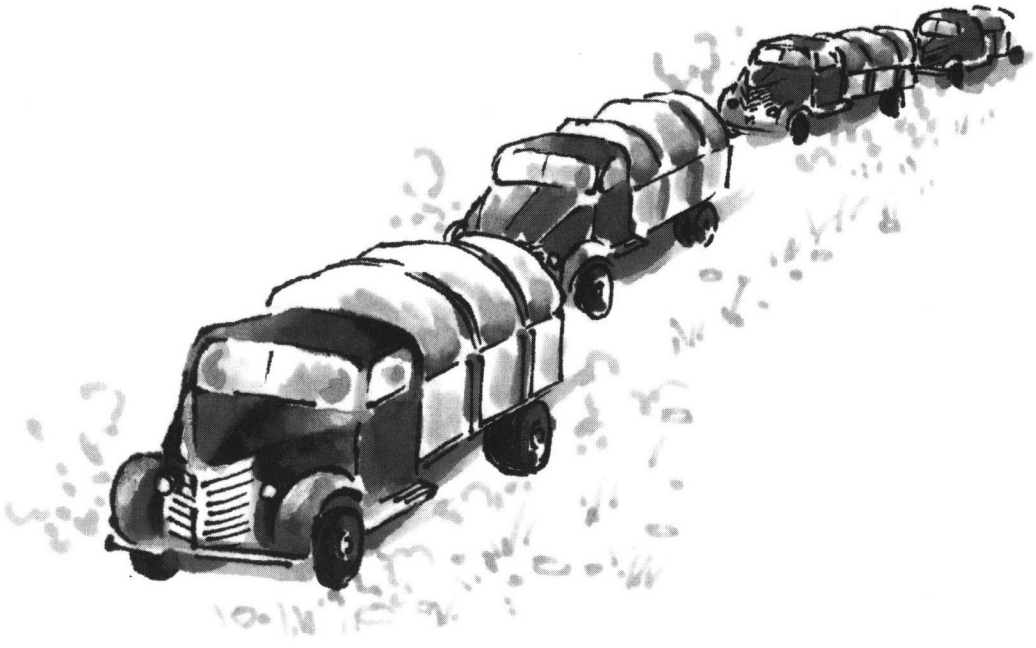
兵站自動車隊の戦闘

昭和十四年三月二〇日、いよいよ南昌攻撃の火蓋が切られた。この日は雨降りであった。二〇〇門の各種砲門が開かれ一斉攻撃だった。遠く近く重砲、山砲の炸裂音の連続だった。修水敵前渡河は煙幕をはり、偽装作戦により対岸に上陸し、南昌市内に突入したのである。この日、私は軍医少尉に任官した。南昌が陥落してから、江南地方は比較的平穏となった。九江～南昌間の警備は歩兵部隊が当たっていた。

この頃、三兵自部隊は安義で平穏に駐屯していた。十二月になると、蔣介石は全戦線にわたり攻勢に出るという情報が入った。敵兵はわが兵站線に出没してゲリラ戦を展開してきた。

十二月二二日午前十時、部隊本部より電話があり、今朝出発した自動車隊が張公渡付近の大源橋で敵の襲撃をうけている。三兵自部隊は直ちに戦闘部隊を編成して救援に赴くべしとの命令であった。

坂井中隊長以下将兵二個小隊と軍医一名（中村）と衛生兵二名が貨車に分乗し、大源橋へ急行した。途中の電柱はほとんど破壊されていた。大源橋西方二キロの地点では、自動車古川隊が火線をしき敵と対峙していた。われわれは直ちに下車集結して前進し、道路右側の窪地に身を隠蔽した。この窪地には数人の兵が銃をかまえて前方の高地を睨んでいた。敵は道路左側の高地に陣地を作り、道路を通る人影や車をめがけて小銃や機関銃を撃っているのだ。傍をみると一兵士が倒れていた。隣の老少尉が「この兵を診てやってくれ」と、倒れている負傷兵を指さした。みると腹に包帯を巻いていたが血が滲んでいた。顔は蒼白で脈はほとんど触れない。早速三角布で腹を巻き換えて、カンフルを注射したら、脈は触れるようになった。半ば目を閉じ眉をしかめ、細い声で「腹が痛い、足を伸ばしてくれ」といった。戦友は「よしよし」と腰の下に外套を入れた。「もう心配するな、今注射をした。すぐ野戦病院へ入れてやるから」と耳元で叫んだ。また痛むのでモルヒネ一筒を注射した。その間、弾が頭上を飛んでくる。傍にいた兵が「軍医殿、今自分の隊の中隊長が足をやられたので診て下さい」というので、その位置を聞いて、私は衛生伍長をつれてその窪地を飛び出した。道路めがけて駈け出し、反対側の草むらに飛び込んだ。小銃が一斉に鳴り出した。草むらの陰には、中宮部隊長と受傷した兵士が避難していた。部隊長は「来た来た。早く軍医に診てもらえ」と叫んだ。そこには佐藤隊長が左大腿盲貫銃創で座していた。また、その部下は肩から腋の下の貫通銃創であった。二人とも比較的元気で、包帯を巻き直してモルヒネをそれぞれ一筒注射をした。戦場ではとにかく麻薬を注射して痛みをとってやるこ

とが緊急治療である。また前方から担架に乗せられて二人の兵が運ばれて来た。一人は胸部、一人は腹部の銃創で重症だったので、応急処置をして後方へ運ばせた。振り返ってみたら、ここは他部隊であった。自分の隊はどこにいるのか。中隊と連絡がとれず不安になってきた。しばらくして、三兵自の隊長が左手の山から出てきた。中隊は左翼に進出して高地にこもり、敵と対峙していたとのことであった。敵は前方の陣地によって抵抗を続けている。太陽は西に傾き、我が部隊の後方に傾いていて、東にある敵陣地は夕映えで山々ははっきりと浮かび、敵兵の動静がはっきり見える。我が方はこれに射撃を加えていた。

そのうち友軍の迫撃砲、山砲が増強されて敵陣に対して釣瓶(つるべ)うちに攻撃し、殷々(いんいん)たる炸裂音は山にこだまし、山を揺るがし、敵は遂に退却を始めた。中宮部隊長は各部隊に突撃命令を出した。自動車隊の兵士は銃に着剣し、喊声をあげて敵陣へ殺到した。日はすでに落ち、眉のような三日月が蒼白い光を山々に照らしていた。午後九時、戦闘は終わった。実に十時間に及ぶ戦いで、将兵はホッとして空腹であるのに気がついた。